

---

# アザミの綿帽子

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アザミの綿帽子

### 【Nコード】

N2907W

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

我が儘で自分勝手な姉（麗花）に幼い頃より色々な大切な物を奪われ続け、とうとう恋人まで奪われて、アザミの花のように心に棘を持ってしまい、人を信じる事が出来なくなり、恋にも臆病になってしまった妹（霞）。幼い頃の辛い体験から、心に鋭い棘を持ってしまい、家族や回りの人を傷つけ続けてきた姉（麗花）、ある日その過ちに気がつき……。人々の様々な思惑と人間関係が交差・展開していく中で、幸せに到達するまでの物語。

（昼ドラ風愛憎的要素も含む雰囲気の設定ですが、行き当たりばっ

たり小説で、先が読めません。変更や修正が多いかもしれませんが、ご了承ください。）

## 第1話 切ない記憶（妹・霞の気持ち）

倉橋霞は、<sup>くらはし かすみ</sup>1人で暮らしている1DKのアパートの、書斎兼寝室として使っている6畳洋間の窓辺の隅に置いてある、小学校の頃から使っている古ぼけた年代物の木の机の前に座って、物思いにふけるような表情をした。

昔から物持ちのいい方だったので、古びてはいるがあまり傷もなく綺麗だ。

デザインもシンプルだが国産の無垢の天然木を使っていたいいものなので、付属の棚を外せば学習机と言う雰囲気も無くなり、書き物をしたり、パソコンデスクにも重宝している。

何よりも思い出の沢山詰まった机だし、今は亡き祖父が自分の為に買ってくれた大切な物だ……。

我が儘で自分勝手な姉は、霞の物で気に入った物は何でも奪って自分の物にして来た。だが、この机だけはとうとう自分の物には出来なかった……。

それは、この机を欲しがって我が儘を言ってる姉の様子を偶然祖父が見つけ、烈火のごとく厳しく叱りつけ、更に、両親にも厳しく注意したからだ。

祖父は、姉の方を甘やかしすぎる、霞が可哀想だと強く言ってくれた……。

姉に叱りつけている祖父はとても恐ろしく、自分が怒られているわけではないのに飛び上がるほどだった……。

姉もかなり参ったようで、その日の夜はなかなか寝つけない様子で夜中に魘されていた……。

ちよつと罪悪感があつたけれど、そんな姉を見て、霞はなんだか心がスツキリした。

机の上面には、デスクマットを外すと彫刻刀で彫られた長く深い傷

がある．．。

祖父に叱られて、不貞腐れた姉が嫉妬して付けた傷．．。翌朝気がついた．．。

悲しかった．．。年金暮らしの少ない貯金の中から一生懸命捻出して買ってくれた大切な物だと思うと、心が痛くてとても悲しかった．．。

霞は夢から醒めたようにフツと我に返って、机の引き出しを開けて小さな木の宝箱を出した。

蓋を開けて、中から壊れたりボンの形の髪留めを出して手にとって見た。

これも嫌な思い出だけれど、捨てられない．．。ふとあの日の事を思い出す．．。

霞が母に買ってもらって、嬉しくてすぐに髪に付けた新しいパツチン留めを、目ざとく見つけて、姉が奪うように取った．．。あつという間の出来事だった．．。

そして自分の髪の毛につけて「霞は顔が地味だし、私の方が絶対似合うわ．．。これちょうだいね！！」何の罪の意識もなく、飄々とした顔で姉が言った。

「返して！！私が買って貰ったんだから！！」

6歳も年の離れた姉は体格的にも差があり、喧嘩しても負けてしまうのが常で、いつもは文句は言っても諦める事が殆どだったが、これは本当に気に入っていた．．。

リボンの形で、キラキラ綺麗なラインストーンが鑲められていて．．子供心にとても美しいなと思った。

今回は絶対に取りられたりする物かと思っていた．．。姉の髪の毛から引きちぎるように奪い返した．．。

「いたっ！！なにをするのよ！！」

怒った姉は、更に奪い返そうとして、争っている内にパッチン留めは留め具が壊れてしまった・・・。

「霞が無理矢理引っ張ったからだからね！！」

悪びれもせず吐く姉の捨て台詞・・・。

悲しくて悲しくて・・・目が真っ赤になって腫れ上がるくらい泣いたっけ・・・。

うちの姉は何でこんなに意地悪なんだろう・・・何でこんなに幼稚で我が儘なんだろう・・・。

友達のお姉さんは皆優しそうで、すごく羨ましかった・・・。

友達から優しいお姉さんの話しや、仲の良い楽しそうな話を聞く度に淋しい気持ちになり、心がズキンと痛んだ。

そして私は姉が大嫌いだった・・・。

霞はパッチン留めを箱にそっと仕舞って、蓋を閉めて引き出しに入れた。

幼い頃は、可愛いキャラクターのペンケース、ふわふわのうさぎのぬいぐるみ、可愛いエナメルのハートのペンダント、花のモチーフのラインストーンが素敵なおもちゃの指輪・・・。

大きくなって背丈も体格も差がなくなると、お気に入りの洋服や靴・・・アクセサリー・・・。

姉に奪われる物は益々加速していった・・・。

私もいちいち姉と争うのもしんどくなって、放っておく事が多くなった。

両親がこの事にあまり関与しない気持ちも少し分かって来た・・・。ヒステリックで疳の虫の強い姉を怒らせると手に負えない感じで、あまり叱り過ぎるとヒステリーを大爆発させ時には過呼吸になった

り．．．。兎に角扱いにくい性格だった．．．。

幼い頃は、両親は姉ばかり可愛がってると思っていたが、後々そうではない事に気がついた。

扱いにくくて手を焼いていて、大人しい妹の方に我慢をさせて、放っておくのが一番得策だと考えたようだ．．．。

姉の我が儘に閉口した母が、ポツリと愚痴を溢した事がある．．．。

「あなたは麗花<sup>れいか</sup>みたいになっては駄目よ．．．。あの子は本当に困った子で手を焼くわ．．．。あんな子生まなきゃ良かった．．．子供は霞だけで良かったわ．．．。」

物凄く複雑な気持ちだった．．．。

姉も嫌いだったけれど、そんな両親も嫌いだった．．．。いつも私に我慢を強要する両親．．．。

「あんな子生まなきゃ良かった．．．」あの言葉を姉が聞いたらどう思うだろう．．．。

見て見ないふりするをする、いつも無関与な父、無責任な言葉を簡単に口に出す母．．．。

かんしゃくを起し騒ぐ姉に怯まずに、悪いことは悪いと幼い頃から根気強く厳しく言って聞かせていたら、こんなに我が儘な人間にならなかったのではとも思う．．．。ある意味可哀想な人のようにも思えた．．．。

早く家を出たかった．．．。毎日がブルーだった．．．。

そんなある日、オアシスのような楽しい日々が訪れた。

高校１年の時２つ年上の先輩から告白されて、お付き合いする事になって、世の中が薔薇色に変わった．．．。

すらりと背が高くてカッコよくてスポーツマンで、頭も良かったし、女子に人気が高かったし、とても爽かな優しい人だった．．．。自分には勿体ないぐらいの人だと思った．．．。

名前は、城崎竜哉しろさき たつや．．．。

霞は早く自立して家を出たかったので、高校を卒業すると進学はせずに、電子機器メーカーの事務員として就職した。

貯金が貯まるまでは、一人暮らしは無理だと渋々その頃はまだ実家に居たが、そろそろ一人暮らしをしようかなと考えている頃だった．．．。

高校卒業後、竜哉は大学に進み霞は就職と、進む道は違ったが、おつきあいは順調に続いていた．．．。

竜哉が就職して落ち着いたら結婚もと、互いにそんな夢もぼんやりと思い描いていた．．．。

だが．．．その夢も儚く消えた．．．。

姉が、彼まで奪っていった．．．。どうやって彼を誘惑したのか？いつの間にそんな関係になっていたのか不覚にも全く分からなかった。

気がついた時には、姉のお腹には彼の子供が宿り、彼の卒業も待たずに出来ちゃった結婚することになった。

短大を卒業後、家事手伝いでプラプラしていた姉には経済力も無く、結婚後は彼が大学を卒業し就職するまでは、2人して実家に身を寄せて両親の世話になるという予定のなんとも情けない2人だった．．．。

呆れ果てて、言葉も出なかったし、彼への思いも一気に冷めた．．．。

姉に対しても、なにも言葉は出て来なかった．．．。まさか恋人まで奪うとは思っても寄らなかった．．．。

2人が結婚後、義理の兄になった元彼とひとつ屋根の下に同居だな



んて最悪だと思い、霞はすぐに家を出た。  
そして交通の便のいい都心の駅近くのアパートを見つけ住む事にした。。。。

- - - 明日は2人の結婚式。。。。

霞は、どんな顔をして式に出ればいいのか分からないし、2人を許せないし、祝福する気持ちも起きない。。。。  
仮病を使ってパスしたい気持ちだった。

(第2話に続く)

## 第1話 切ない記憶（妹・霞の気持ち）（後書き）

感想は完結を迎えてから受け付けとさせて頂きます事をお許し下さい。  
m (——) m

## 第2話 異父姉妹（父・母の心境）（前書き）

今回はDV的な要素を含む文章表現がございます。

こう言った表現が苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分ご注意の上でお読みになって下さい。

## 第2話 異父姉妹（父・母の心境）

結婚式前日の夜、夫婦の寝室として使っている和室に布団を並べ、霞の父と母は寝ながらあれこれと小声で話し込んでいた。

「お父さん．．．。明日は麗花の結婚式ね．．．。娘の結婚式といえば晴れ晴れしくて嬉しいはずだけど、全然嬉しくもないし、嫌悪感さえ感じてくるわ．．．。こんな結婚式ってあるかしらね．．．。母親が全くおめでたいと思わない式なんて．．．。出来るなら、式なしで入籍だけで済ませて欲しかったわ．．．。」

「本当だな．．．。だが、麗花が強く望んでいる事だし、結婚してしまえば巢立ちのような物で、親としてしてあげられる事も限られてきて、一步離れて見守ると言う立場に変わると思うし．．．。親としての役目の終りと言うか、とりあえず修了式のような気持ちでいるよ」

「あなたは本当に良くして下さいって思うわ。実の子供でもないのに、ましてや実の娘の霞が姉さんからあんな目にあっても、口出しもせずにくつと我慢して下さい．．．。麗花はね、私達に対する復讐の気持ちと、霞に対する嫉みと嫉妬を爆発し続けてきたんじゃないかなって感じるわ。私がもつと心を鬼にして麗花に厳しく対応すれば良かったんだわ。どこことなく負い目を感じて腫れ物に触るように遠慮してきてしまったから、結果としてあんな子に育ってしまった．．．。」

「麗花の父親は兄さんだけど、俺の娘だと思ってるよ。それに、現実、俺の姪で血の繋がりがあってあるんだから、全く他人と言うわけじゃないしね．．．。俺も兄さんに負い目を感じていたのかもしれないよ」

ない。麗花に対して遠慮のような気持ちがあつて、口出し出来無かつたのが良くなかつたと今ではとても反省してる……。そんな事思つても、今更遅いけどな……」

霞の父と母は、お互いにぼんやりと天井を見つめ、気持ちを合わせたように2人して溜息をついた。

そして互いにあれこれと思いを巡らし、少しの間沈黙が続いた。

その沈黙を破るように霞の母が口を開いた。

「竜哉くんの事は、霞が時々家に連れてきてたし、高校生の頃から知ってるし、なかなか好青年でいい子だなんて思ってたし、近い将来霞と結婚するのかしらって漠然と思つてたから……。麗花とあんなことになつて本当にショックだったし、今でも信じられないような気持ちだわ。竜哉くんが自分から好んで麗花を誘惑するなんて思えないのよね……。我が子の事を悪く言うのもなんだけれど、麗花が何らかの形で誘惑してあんなじゃないかと思えてならないわ……」

竜哉くん同様あちらのご両親は穏やかで腰の低い方達で、今回の件では『父親として、男として、誠意を持って息子に責任をとらせますので……』と平謝りで、全てこちらの意向に従いますと申し訳なさそうにおっしゃられて、見ていて痛々しかったわ……。私達同様、とても複雑なお気持ちだと思つわ……。霞の事も知ってるし、姉とこんな風になつてしまふとは思わなかつたでしょうし……。まだ大学も卒業してない内に結婚だなんて……」

「本当に複雑だよな……。悪い考えだけど、結果として兄さんからお前を奪つてしまった俺への復讐なんじゃないかなつて……。兄さんの怨念なのかなつてちよつと感じるよ。自分の娘が……。姉が妹から恋人を奪うなんて……」

「あなたは全く悪くないわ．．．。全て私が悪いのよ．．．。でも、あなたのお兄さんの事を．．．亡くなった人の事を悪く言うのは悪いけど．．．優しいのかけらもないような自分勝手に冷酷な人で、うんざりだったわ．．．。兄弟なのに、あなたとは全く性格が違うなってしみじみ思うわ．．．。」

「寛子．．．。兄さんには酷い事をしたと思ってるし、あの世で俺の事を恨んでそんな気がするけど、俺は寛子の事を今でも変わらず愛してるし、君と一緒になれて本当に幸せで良かったなと思ってる。後悔した事は全然無いんだ。」

だが．．．。霞には本当に可哀想な事をしたと思ってるんだ．．．。麗花がああなっってしまったのも、俺の責任だ．．．。子育てに関しては後悔だらけだよ」

「あなたは悪くないわ．．．。私のせいよ．．．。麗花は実の父親そっくりの性格で、霞の様に可愛いつて思えないし、愛そうとしても、何処か愛せない所があつて．．．。霞はあなたに似て、思いやりに深くて我慢強くて優しくて．．．。可愛くて愛おしくて．．．。心の内の本心を見せてはいけないっていつも葛藤していたけれど、麗花には見透かされていたのかしらって感じるのよ．．．。」

．．．実は、麗花と霞は異父姉妹だった．．．。

霞は今の両親の本当の娘であり、麗花は霞の父親の兄と霞の母との間に出来た娘である。

寛子（麗花と霞の母親）は、見合い結婚して麗花が生まれた。

麗花の父である義宏は、家業を受け継いで、小規模ながら電子精密部品の工場を経営していた。

スラリと背も高く容姿もなかなかで、頭も良く、物腰などに品格を感じさせるような紳士的な雰囲気があり、母は一目惚れして結婚を

決めた。

結婚前は穏やかで優しく、きつと温かな素敵な家庭を築けるだろうと寛子は夢を描いて希望に溢れていた。

だが・・・結婚してすぐに分かったが、義宏は見えっ張りで、外面が物凄くいい人だった。

結婚した途端に、妻は自分の所有物のような扱いに代わり、亭主関白となり、我が儘で自分中心で、寛子は何度も泣かされた。時には手を上げられる事もあった・・・。

絶望して離婚を決意して、その気持ちを伝えたが全く応じず、離婚を切り出された事で自尊心も強かった義宏は、自分のプライドを傷つけられたと逆恨みし、暴力も酷くなってきた。

今までは、服に隠れて分からない所が青アザになる程度だったが、だんだん顔を腫らすほどになり、回りも夫の暴力に気がつき始めていた。

そんな絶望の淵の中にいる時に、副社長として工場を支えていた、義宏の弟であり今の夫である晴宏（はるひろ・霞の実父）が、間に入ってくれ、親身になって相談にのってくれ、時には暴力から守ってくれもした。

弟が何かにつけ妻を庇う様を目の当たりにして、2人にはないかあるんじゃないかと疑い始めた義宏は、麗花は自分の子じゃないんじゃないかと疑いを持ち始め、とうとうまだ3歳の幼い娘にまで抓ったり叩いたり虐待をし始めた。

今までは育児には無関与ではいたが、手を上げたり虐待をするような事は全く無かった。

不器用で愛情表現の乏しい人なんだろうと、そう思って、優しい父親としての役割は期待していなかったが、まさか自分の娘にこんな

事をするとはと寛子はこの事がきっかけで、義宏に対して激しい嫌悪も抱くようになった。

子供を守る為、暴力夫から距離を置く為に手を貸してくれたのが今の夫であり、義宏の実の弟である晴宏だった。

もう限界だった．．．弱者に手を出す最低の人間．．．こんな夫と父親はいらない！！母子家庭でもいい．．．その方が全然ましだと思った。

離婚が成立するまで身を隠そうと決心した。

義宏は血眼になって妻と娘を探し回り、力を貸してくれた晴宏にも激しい暴力を振るったりしたが、頑として居場所は言わず、探し当てられる事はなかった。

離婚までの道のりは長期戦になるだろうと寛子は覚悟した．．．。

だが数週間後、義宏は自らの手で命を断ち幕を閉じた．．．。

遺書はなく原因ははっきりとは分からなかったが、見えつ張りで見えつばかり重視する性格が災いして、昔なじみの言葉巧みな悪い友人に騙されて、マルチまがい商法に手を出し、とても払い切れる額ではない借金をこしらえてしまった事が後で判明した。

一時は土地も工場も手放さなくてはいけない．．．手放しても借金が追いつかないぐらいの金額だったが、晴宏が身を粉にして懸命に働き、元々勤勉で頭も切れた晴宏は前から取得していた特許権を大手企業に高額で売却し、土地工場や従業員を守り抜いた。

義宏の事もあるし、互いに好意を持っている気持ちは封印し、恋愛関係になるなんて全く考えてなかったし、許されない事だと思ったし．．．ましてや結婚だなんてとんでもないと思っていた2人だったが、祖父は2人が心魅かれあっている事を察し、また、女手1人で子供を育てるのは大変だし、麗花の叔父でもある晴宏が父親になるのはいい事ではないかと思うと結婚を強く勧めた。祖父の大きな後ろ盾もあり、2人は急速に魅かれ合い結婚．．．。やがて霞が生まれた．．．。



義宏が亡くなった時には麗花はまだ3歳で、父親としてのスキンシップも薄かったこともあり、自然と晴宏を実の父の様に思いとても懐いていたが、麗花が小学1年の時に、クラスメートの友達から悪い話を聞いた。

その子はお母さんと近所のおばさん達が話しているのを耳にしたし、近所でも有名な話だった。

そして、麗花の実の父親は自殺で亡くなった事、今の父親は麗花の本当のお父さんの弟で、本当は麗花の叔父さんだと言う事を聞かされた。

更にその情報は真実とは違うねじ曲げられた内容で、麗花の本当のお父さんは、叔父さんと母親が浮気して、一緒になって麗花のお父さんを家から追い出して、経営していた工場も奪い取り、その事を悲しんで自殺したらしいと聞かされた。

その頃から麗花は我が儘で手に終えないような子供に変化していつてしまった。

更に妹まで生まれ、可愛がってはもらえけど自分の居場所が無いような虚しさを感じるようになり、心の中がモヤモヤして妹がとも羨ましく、嫉ましく感じはじめて、その感情はどんどん大きく変化していった。

麗花が両親に実父の自殺の事を知っていると打ち明けたのは、多感な中学生の頃で、麗花が思い込んでる真実と違う歪曲された情報を訂正する機会もなく、両親の話しに耳を傾ける状況ではなく、実際どのように思っているのか互いに心の内をさらけ出す機会もなく今のような状況に到ってしまった……。

……明日はいよいよ結婚式……。

寛子と晴宏はなかなか寝つけずに、互いに何度も溜息を漏らした。

(第3話に続く)

### 第3話 あの日的事（竜哉の心境）

いよいよ結婚式当日となった。

普通プロポーズから挙式まで半年から一年かかるといわれているが、『出来ちゃった婚』は、出来るだけお腹の膨らみの目立たないうちに、最短期間で挙式と披露宴を行う必要があった。

急遽捜し回って、大きなホテルの授かり婚プランで、ホテル内のチャペルでの挙式と披露宴のセットのプランに決めた。

互いの両親は、出来ちゃった婚でもとてもショックなのに加え、姉が妹の恋人を奪った略奪婚でもあるのでダブルショックで、入籍だけで構わないのではないかと強く望んだ。

竜哉も入籍だけで強く希望したが、頑として麗花は譲らなかった。元恋人と姉の結婚式に出席しなくてはいけない霞の気持ちを思ったら、とんでもない事だと竜哉は思った。

一步も譲らない麗花に結局折れてしまった弱い自分が情けなかった。  
。。。

情けない事だらけだ。。。自分が嫌になる。。。

竜哉は妻となる麗花に全く恋愛感情は持ち合わせてなかった。

本心を言えば、今でも霞の事を狂おしいほどに愛している。だから、今日の結婚式は絶望の日のような、自分の人生の中でどん底の日のような気持ちだった。

いや。。。これからどん底の日々が続くのだ。。。もう自分の人生は終わった。。。そんな気持ちだった。

霞と高3の時からからつき合い始めて4年。。。

霞を知れば知るほど、気持ちが通じ合い、楽しくて心が癒されて、付き合う年数が長くなって来ても彼女と一緒にいる新鮮な気持ちと

トキメキは色褪せなかった．．．。

なのに．．．何でこうなってしまったんだろう．．．今でも訳の分からぬ気持ちだ．．．。

麗花はきつと、霞の携帯のアドレスをこっそり盗み見たのだろう．

。突然自分の携帯に麗花から連絡が入り、『霞の事で大事な話があるから』と言葉巧みにホテルのバーラウンジに呼び出されて、変だなとは思いつつも出かけてしまった。

一杯だけとカクテルを頼んで、大した量飲んでもいないのに何故か意識が途絶えた．．．。

思い当るのは、肝心の霞の話はなかなか出て来ないし、嵌められたとやつと気がつき、どうやってあのネチコイ姉を納得させるような言い訳を言つて、早くこの場を去ろうかとアイデアを練る為に中座してトイレに用を足すふりをして席を外した。

．．．．．きつとその時に、俺の飲んでいたカクテルに何か仕込んでんだ．．．。

気がついた時には、ベッドの中だった．．．。

何も着ていない状態で、隣にはやはり同じく何も身につけて無い麗花がまるで獲物に巻き付く大蛇のように、がっしりと自分に抱きついて眠っていた。

氷水を大きなバケツで大量にぶっ掛けられたような、冷たい閃光が自分を貫いた。

思わず悲鳴を上げてしまった．．．。

化け物を見た時のような恐怖の雄叫びだったと思う．．．。

霞の事を大切に思い、結婚するまではと清い交際を続けて愛を育んできた。

あともう数ヶ月．．．大学を卒業して就職して、1年ぐらい経ったらプロポーズしよう．．．生涯愛する人は霞だけ．．．俺の妻は霞だけ．．．寝ても覚めても霞で頭がいっぱいだった．．．。本当に本当に好きだった．．．今でも．．．。

なのは何でこうなっちゃったんだ！！ もう霞に合わせる顔がない  
．．。なに食わぬ顔してこの事を黙っている事も出来無かったし、  
あの姉の気性なら、得意気に妹に喋りそうだ．．。彼女をわざと  
傷つけるように．．。

霞から、姉の話も色々聞いていたし、悩み事のような相談にも乗っ  
てあげた事も何度もあったし、励ましたり元気づけたりしてあげた  
事も度々あった。

麗花に対して、いい感情は持ち合わせていなかった。好きか嫌いか  
だったら二者択一、迷わず『嫌い』を選択しただろう．．。

姉の口車に乗って、のこのこと会ってしまった事を後悔してもし切  
れないぐらい後悔した。

後の祭りだと言う事も良く分かっているが、それでも思いつきり後  
悔したかった。

．．．姉の罠に嵌められた！！そう確信した。

そして一番大切な人である霞の心をスタスタに引き裂いてしまった  
ような事をしてしまったと、心が痛かった。

霞の事を思うと、心が張り裂けて粉々になる気がした。

そしてそれから間もなくして、又呼び出された。

あれからすぐに携帯番号を変え、もう二度と連絡をとれる事など出  
来ないはずだったのに．．。

図々しい事に俺の実家に電話を入れ、更に俺の母親に「竜哉さんの  
赤ちゃんができました」とまで言った．．。

初め母親は少し驚いたが、姉の事を霞と勘違いして、霞の事を娘の  
ように．．。未来のかわいい嫁のようにも思っていて、結婚が少し  
早まっただけねと喜んだ．．。

だが．．。相手が姉だと分かり．．。更に霞とはとても姉妹とは思  
えないぐらいの気質に驚愕し、1週間寝込んでしまった。

．．．姉は子供を盾に結婚を迫った．．。

本当に意識が無かったからと言って、本当に俺はあの蛇女を抱いたのだろうか？自分が信じられなかった．．．。

だが．．．。母子手帳と子供の超音波写真を見せられたら疑う余地が無い．．．。

おまけに「子供が生まれたら、DNA親子鑑定を受けてもいいわ．．。間違いないあなたの子だもの．．．」

自信満々で、勝ち誇ったような笑を浮かべる麗花．．。

「子供は絶対に産むし、父親としての責任をきっちり取ってもらうから」と迫られた．．．。

こうなったら俺は、父親の責任を果たすしかないと腹をくくった。

だが．．．。心の底で、あの姉を妻だとは思わずに、ただの同居人だと思ふ事にしようと心に決めた。

我が子は可愛いと思うが、あの姉は憎らしいおぞましい存在にしか思えない．．．。

結婚しても夫婦としての契りはもう絶対にありえないし、指一本触れられるだけでゾツとする．．．。

とりあえず男として、子供に対する責任は果たす覚悟だ．．．。子供が成人するまで養育する責務は果たそう．．．。だが．．．。

あの女を妻とは認めない．．．。俺と結婚した事を後悔させてやる．．。愛のない結婚がどんな物か思い知らせてやる！！

あの自己中で我が儘な姉が子供を可愛がりそうにも思えないし、家事をやりそうにも見えない．．．。こんな生活が長く続くとも思えない．．．。

いつか離婚を勝ち取って、子供を引き取って、父子家庭になろう．．。

結婚後は父子家庭を勝ち取るのが細やかな夢のように思えた．．．。

きっと俺の事を許してはくれないだろうけど．．．霞．．．。君と結婚したかった．．．。

俺が永遠に愛するのは、霞．．君だけだ．．。  
ああ．．。何でこんな事になってしまったんだ．．。

．．．間もなく魔の結婚式が始まる．．。

（第4話に続く）

#### 第4話 麗花の凍った心の内

銀系の刺し刺繍と美しいビーズを鏤めた豪華なウエディングドレスに身を包み、椅子に腰かけ大きな鏡の前で冷ややかに自分の姿を見つめる麗花．．．。

ぼんやりと霞の事を考えていた。

．．．霞が羨ましかった．．．そして憎かった．．．とても．．．とても．．．。

だからいいんだ．．．これでいいのよ．．．。

実父の顔はぼんやりとだけど、微かに覚えている．．．。

実父との思い出はあまりない．．．。幼い頃の事を思い出そうとすると何となく恐怖の感情が沸き上ってきて、真っ黒な雲に包み込まれたようになってしまって、結局なにも思い出せなくなってしまふ。

思い出せるのは、何故か母が私を連れて父から逃げ回っていた事、時々現れる優しいおじさん（今の父）．．．。

優しいおじさんは、いつもニコニコして可愛がってくれて、あったかで．．．一緒にいると凄く嬉しくて幸せだった．．．。

それからあまり時間は経ってなかったと思う．．．。

実父が亡くなった．．．。葬儀はジトジト雨の降る薄暗い日だった．．．。

実父の遺影と、かすかに覚えている火葬場の重苦しいちょっと恐い雰囲気と、「子供は入れないから、ここで待っていないさい」と母に言われて、知らない喪服を着た近しい親族ではなさそうなおばさんと一緒に待ち合い室で待っている時に、お菓子食べてジッと待っていた思い出．．．。



お菓子は綺麗な銀の器に盛られて待ち合い室のテーブルの上に置かれていた。

どれも子供向けのスナック菓子では無くて、年より臭い茶菓子ばかりで不味かった．．．。

それから暫くして母と今の父が戻ってきた時には、母は白い布で包まれた箱を抱えていた．．．あれが実父だった。

やがて母は、私を連れて知らない家にやって来て、あのおじさんの肩に愛おしそうに手を添えて、「今日からここが私達の家よ．．．この人が今日からお前のお父さんよ．．．」嬉しそうに言った。

あの時の嬉しそうな表情は、母の顔じゃなかった．．．今思えば好きな人の前で含羞む一人の女の顔．．．。

こんな柔らかな幸せそうな母の顔を見た事は無かった．．．。

．．．ふーんそうなんだ．．．。

優しいおじさんの事はすごく好きだから、この人がお父さんになってもいいや。単純にそう思った。

実父の事はあまり覚えていないし．．．別に悲しいとか辛いとかそんな事は感じなかった．．．。

それから幸せな日々は続いた．．．。

だけど、小学校１年になって、クラスメートからとんでもない話を聞かされた。

実父は自殺だったと．．．。

今の父と母が浮気して、麗花の本当のお父さんを追い出して、それを悲しんで自殺したらしいと．．．。

そして、今の父は麗花の本当の父親の実の弟で、つまり麗花の叔父さんで、経営していた工場まで奪ったと．．．。

優しい顔をして、母と工場と実父の命まで奪った今の父．．．許せない！！そう思った．．．。

更に、妹が生まれて完全に自分の居場所が無くなってしまった気がした。麗花の心は崩壊した．．．。

妹が出来たからって、変わらず父は優しくかったけど．．．母は自分を通して何処か遠くを見ているような瞳をしてた。

きつと私を見ると実父の事を思い出すんだなと何となく感じてた。母と父と霞は本当の家族．．．そして私だけ異邦人のような何処か別物のような．．．そんな感じがしてた。

大分後になってからだけど、戸籍を見て私だけ養女になっていたから『やっぱりな』と思った。

再婚した場合、養子縁組み届けを出さないと父とは家族関係にならない．．．だから養女．．．。

『養女』の二文字に激しい憤りを感じた。私だけ．．．。

皆許せない！！母も、今の父も．．．そして、私から幸せを全て吸い取って、無邪気な顔をしてのうのうと暮らしている霞も！！

霞の物は本当は全部私の物．．．。今の父が母を奪わなかったら霞は産まれてこなかった．．．。憎らしかった．．．。

いつも心の中がモヤモヤして満たされなかった．．．。

重い鉄の石ころがいつも心の中を暴れ回り苦しくて痛かった．．．。

霞から大事な物を奪って悲しませるとほんの少し心が晴れた．．．

だけど、スッキリはしなかった．．．。

だからもつともつとエスカレートしていった．．．。

だんだん妹は、物を奪われても悲しい顔をしなくなった．．．。つ

まらなかった．．．。

もつともつと．．．苦しめてやりたい．．．困らせてやりたい．．．。

いつもその感情に囚われるようになって、機会をずっと狙っていた。

妹の一番大事な物．．．。それは恋人の竜哉さんだ！！

若々しくて、真面目で純粹で、背も高くて綺麗な顔立ち．．．素敵

な彼．．．。凄く羨ましかった．．．。

2人は温かで、幸せそうで．．．清らかで純粹で．．．凄く輝いて見えた．．．。

そして欲しいと思った．．．。

羨ましいと言う気持ちは、どんどんエスカレートしていき、やがて奪い取りたいと言う欲望に変わった。

．．．．．どんな事をして、霞から竜哉さんを奪って見せる！！

霞が入浴している時に霞の部屋に忍び込み、霞の携帯のアドレス帳を開いた。

姉を警戒してか開閉ロックがかけられていたが、妹の思いつきそうな番号なんて姉ならすぐに分かる．．．。思い当る数字を色々入力してみた。何回かやっているうちにロックが解除された。

アドレス帳から竜哉のデータを開いて、慌てて赤外線通信で自分の携帯に入れた。そして何事もなかった様に携帯を戻した。

それから言葉巧みに竜哉をホテルのラウンジバーに呼び出し、竜哉が席を外した隙にカクテルに睡眠薬を仕込んだ．．．。

戻って来てカクテルを口にした竜哉はすぐに意識朦朧とし始めて、予め用意しておいた部屋に竜哉を連れ込み、さも関係があつたように演じた。実は竜哉とは全くなにもなかったのだった。

間だウブで純粹な少し年下の世間擦れしてない竜哉を騙すなんてお手のもんだった。

竜哉は物凄くショックを受けて動揺している様子だった。

その後すぐに携帯番号を変えられて、連絡がとれなくなった．．．。ならば実家に．．．竜哉の親に連絡してやる！！

数ヶ月大人しくしてから、頃合いを見計らって妊娠した素振りを演じ、竜哉の実家に電話して、母親に妊娠したと告げた。

そして、結婚して赤ちゃんが出来て、幸せそうに母子手帳に挟んだ超音波写真を見せる昔からのチャライ遊び友達に、謝礼を払うからほんの少し母子手帳と超音波写真を貸して欲しいと頼み込んで、彼女から借りた母子手帳の表紙の名前の部分に同色の貼って剥がせるタイプのテープを貼って、自分の名前を書き込み、さも妊娠したように演じた。

借りた超音波写真を見せた時の血の気の失せた竜哉の顔だったら．．．。

妊娠してない事はやがてバレるだろうけど、結婚してしまえばこっちのもんよ！！

後々揉めても、霞から恋人を奪い取れば目的は果たせる．．．。  
私が竜哉さんの子供を身ごもったと．．．そして竜哉さんに責任を取ってもらうからと霞に言った日の．．．あの死人のように蒼白になった霞の顔だったら．．．。爽快だったわ！！

．．．．私から父を．．．工場を．．．幸せを奪っていった、叔父とその娘の霞から、幸せと笑顔を一生奪ってやるんだ！！

麗花は鏡に映る冷ややかな自分の顔を見て、フツと笑った．．．。  
そうよ．．．一生苦しめてやる！！

．．．．その時ドアをノックする音が聞え、派手な感じの同年齢の女性が入って来た。

妊娠5か月のその女性は、大きくなり始めたお腹をカバーするようなマタニティータイプのフォーマルドレスを着ている。

「麗花おめでとう！！ あんたもやるわね」。私の母子手帳使って旦那を射止めたのね？ そこまでやるなんて！！ 私には出来ないわ．．．。その騙された事に気付かない純な旦那様って、一体どこで見つけてきたの？」

「理香．．．。ちよつと声が大きいわよ！！　旦那はね．．．フフ  
フツ．．．妹の彼氏を奪ってやったのよ！！」

「うそおゝ！！それってちよつといくらなんでも酷すぎない？」

「いいのよ．．．。妹と育ての父親にはね色々と恨みがあるのよ．．  
。大事な物を奪われてきた私の復讐ってところね．．．」

「なんか．．．。そんな酷い事に加担したと思うと、心が痛むなあ  
」

「気にしない．．．気にしない．．．」

「まあ．．．。取りあえずおめでとう！！それから私は知らないか  
らね．．．略奪婚に関しては一切責任を負えませんからね．．．後  
でバレてどうなっても知らないわよ！！」

「はいはい．．．。分かってるって！！」

「じゃあ、私は式場の方に行くわね．．．また後でね」

「またね．．．」

．．．．麗花は知らなかった．．．。今のやり取りを全て竜哉が  
聞いてしまっていたことを．．．。

友人が去って行った後、柱の影から竜哉がひょっこり現れて、控室  
の扉の前に憎悪の表情をしながら佇んでいた。

（第5話に続く）

#### 第4話 麗花の凍った心の内（後書き）

自分で書いてて恐っ！！と思いました。（^^；）

## 第5話 魔の結婚式（前書き）

残酷な描写（血の要素はありません）があります。

こつ言った表現の苦手な方は、読むのをおやめになるか、十分ご注意してお読み下さい。

## 第5話 魔の結婚式

理香が去って行った後、すぐに控室のドアが開いたので麗花はまた理香が戻って来たのかと思った。

「理香．．．なに？ どうした？」

そう言つて扉の方を見たら竜哉が立っていたので、驚いてピクリと反応した。

だが、すぐに気を取り直してまた冷ややかな顔をしながら笑つて見せた。

「あら．．．竜哉さん．．．式が待ち切れなくて迎えにきてくれたのかしら？」

竜哉は冷ややかにフツと笑った。

「まだ婚姻届を出してなくて助かったよ．．．もう少しですっかり騙される所だった．．．」

「な．．．何を言つてるの？」

いつも冷静で取り乱した姿を見せない麗花が、目を大きく見開いて凄く動揺した素振りを見せた。

「丁度トイレから戻って来る時に、この部屋の前を通ったらドアが少し空いててね．．．お腹の大きい君のご友人との会話を全て聞いてしまったよ。」

妊娠だなんてでっち上げだんだ．．．あの日君と俺との間にはなにも無かった．．．凄く変だとは思っていたけれど、俺も甘かったよ．．．すっかり騙されてしまつてさ．．．。

その腹の中には何を詰めてるんだ？もしかして天然の脂肪だったりして．．．もう少しで、こんな屈折した年増おばさんの旦那にさせられる所だった．．．」



「なんですって!!」

自分の不利な立場も忘れて、竜哉の一言に逆上して目を吊り上げる麗花。

麗花の恐ろしい形相など物ともせずに、竜哉は式後に代理人に頼んで役所に提出するはずだった、あの忌まわしい婚姻届をタキシードの内ポケットから取り出し、目の前でビリビリに細かく引き裂いて側にあったごみ箱に投げ込んだ。

「なっ．．．何をするの!!」

半狂乱の様になった麗花がごみ箱から婚姻届の破片を拾い集めようとするが、粉々になった婚姻届はもう使い物にならなかった。

「駄目だわ．．．これじゃあもう提出出来ない．．．受理されないわ．．．」

「これで今日の式もジ・エンドだな．．．」

「何言ってるのよ!! そんな事させないわよ!!」

「俺から結婚式は無くなったと参列者の方達には説明して、お詫びしておくよ．．．」

背を向けて立ち去ろうとする竜哉を慌てて追いかけて、すがりつく麗花。

控室の廊下の前で、揉めているその様子に何があったのかと人が集まってきた。ブライダルスタッフも何事かと慌てて駆け付けて来た。今日の2人の結婚式の参列者や親族達も集まってきた。霞も2人が揉めてる様子に驚いて、何事かとやってきた。

竜哉が霞の姿を見つけて駆け寄った。

「霞．．．君の姉さんとは結婚しない。俺はすっかり騙されてたん

だ．．．」

「えっ？」

「俺を言葉巧みにホテルのラウンジバーに呼び出して、俺の飲み物に細工して意識朦朧とさせて、さも関係があつたように演技して、友人から母子手帳と写真を借りてきて細工して、俺や回りを騙して妊娠したふりをしたんだ．．．」

「そ．．．んな．．．」

青ざめた顔をして、霞は姉の顔を見た。

今まで見た事の無いような冷ややかな恐ろしい形相をして立ちつくす姉．．．。

「お姉ちゃんが．．．お姉ちゃんが．．．そんな事までする人だとは思わなかった．．．。お姉ちゃんの心の中にはきつと悪魔が住んでいるんだわ．．．もう．．．もう限界．．．。もう姉だなんて思わない．．．。そんな姉なんか要らない！！」

「霞．．．辛い思いをさせて澄まなかった。俺は麗花とは結婚しない．．．。だからもう一度２人でやり直そう．．．」

竜哉が霞の手を取って優しく言った。

麗花は思った．．．あんな表情．．．私には一度も見せなかった。あんな優しい表情．．．。

「そんな．．．そんな事させない．．．」

麗花は控室にフラリと戻り、バッグに忍ばせていたナイフを持ち出した。

今日の結婚式で、もし竜哉が土壇場になって式を放棄しようとしたら脅してやろうと思ってこっそりバッグに忍ばせていたナイフ．．．。不安に思っていた．．．もしかしたら結婚が破談にならないか．．．

。竜哉が逃げ出そうとしないか。常に不安に思っていた。私から逃げたそうとしたら。これで脅してやる。脅しがきかなかつたら傷つけてやる。いや。霞さえいなかったら。私はこんなに苦しんだりしなかった。

ずっと。ずっと。苦しかった。そうよ。妹さえ産まれてこなかったら。妹がいなかったら。

麗花がナイフを持って戻って来たら、回りにいた人々はパニックのようになつて危険を回避しようと、その場から離れ始めた。

ブライダル従業員が青ざめながら、客を安全な場所に誘導したり、警備員や警察に電話を入れたりし出した。

ワンテンポ遅れて、竜哉と霞も後ずさりしながら、その場を離れようとしたが、真っ直ぐと2人の方に向つてきた。

「霞。あんたさえいなければ。」

霞は凄くショックだった。

姉が私の事を殺そうと向つてくる。恐ろしい鬼のような形相をして。手には光るナイフを持って。

竜哉が庇おうとして霞を自分の後ろに隠した。騒ぎに気付いて両親も駆付けてきた。

「麗花！やめなさい！！！」

「麗花！！なにをするのっ！！！」

竜哉と両親。皆が皆、霞を庇おうとする姿に益々腹が立った。

皆して。なんて霞ばかりっ！！！！

身動きのとれないウェディングドレス姿で、警備員も控えている大きな施設だったのが幸いして、駆けつけた警備員と警察官に麗花は取り押さえられた。

（第6話に続く）

第6話 それから・・・。（麗花 視点）（前書き）

一部分、父と母、娘のDV的なダークな表現がございます。（血の要素も含まれます）

こう言った表現の苦手な方は読むのをおやめになるか、十分ご注意ください。  
の上でお読み下さい。

## 第6話 それから．．．（麗花 視点）

麗花は警察の取り調べで、はつきりと『妹に対して殺意があった』  
と言い、懲役3年の実刑判決となった．．．。

麗花は警備員と警察官に取り押さえられたあの一瞬に、大切な事を  
思い出した。

警察官にナイフを叩き落とされ、床に押さえつけられたあの時だっ  
た．．．。

幼い頃の辛い記憶．．．。

押し倒されて床に転がった自分の上にのし掛かる実父．．．その恐  
ろしい鬼の様な形相。

実父は私の首に手をかけ締めようとした．．．。

『お父さんに殺されちゃう！』とてつもない恐怖と、悲しみと、  
なんとも言えない辛い気持ち．．．。

夢なのか現実なのか分からないような．．．体中の毛が逆立つよう  
な、体が凍って凍えてしまこいそうな気持ちだった。

その時身を挺して助けてくれたのが母だった．．．。実父は今度は  
視界に入った母の方に照準を変え、私を助けようとした母の髪を掴  
み引きずり殴りだした。

恐ろしかった．．．。恐ろしすぎて忘れたかった．．．。

それから実父は台所から包丁を持ちだして来て、手に握りしめ、刃  
をこちらに向けながら、冷酷で無表情な顔をしてゆっくりとこっち  
にやってきた。

脅える獲物をじわりじわりと追いつめる猛獣の顔だった．．．。  
ゆっくり．．．ゆっくり．．．近付いてきた。

母が自分の後ろに私を隠し、盾になって庇ってくれた。

実父がすぐ側にまでやって来て．．．もう駄目っ！と思ったその瞬間、優しい父（今の父）が部屋に飛び込んできて、身を挺して私と母を助けてくれたのだった．．．。

庇った時に腕を切られて、血が滴り落ちていた．．．。  
だけど強かった．．．。

全く怯まずに、実父に向って行って．．．。  
勇気があって力強く逞しい．．．そして優しい父だった．．．。

腕を切られても、少しも怯まずに自分に猛然と立ち向かってくる弟に、実父は恐れを感じ、包丁を取り上げられた後、脱力したように、その場にぼう然と立ちつくしていた。  
優しい父は、そのまま母と私を救い出してくれた。

．．．．．そうだ．．．。その後だ．．．。実父が自殺したのは．．．。

あまりにも恐ろしい記憶だったので、私はすっかり忘れてしまっていた。

深層心理の中で、忘れない、忘れようと言う気持ちが働いて、大事な事を忘れてしまったのかもしれない。

．．．．．実父の死は優しい父のせいではなかった．．．。

あの忌まわしい実父との記憶を忘れてしまっただけじゃなくて、優しい父の事も思い出せなくなっていた。

自分の娘のように、私の事を愛してくれて可愛がってくれたのに．．．。

何でこんな大事な事を忘れてしまっていたんだろう．．．。  
私は優しい父の事が好きだったんだ．．．。

今の私は、あの時の実父と同じだ．．．。  
優しい父を母を妹を．．．妹の大事な人を．．．回りの人皆を傷つけて．．．。

．．．．償おうと思った。

許される事ではない．．．だけど．．．大切な家族、回りの人をも  
う傷つけないように．．．。

苦しめないように．．．悲しませないように．．．変わろう．．．。  
どうやって償えばいいのか分からないけれど．．．これからは、人  
の為に生きていこう．．．。

\* \* \* \*

．．．．あれから霞と竜哉はよりを戻す事は無かった．．．。

昔から、私に取り上げて飽きると霞に返したりする物は、とても物  
を大切にする子なのに、容赦なく捨てた．．．。

『お姉ちゃんのお古なんて！！こんなもの要らない！！』

取り上げて、大泣きさせて、よっぽど大事な物だったんだと思う物  
でも、返すと毛嫌いして捨てていた。

ごみ箱に捨てながら．．．また大泣きする霞．．．。

本当は捨てたくなかったのでしょうか？ 本当は大切に持っていたか  
つたのでしょうか？

あの時は泣きじゃくる霞の姿が面白くて、ドロドロになった暗闇の  
ような心の中が少し晴れてスッキリして、興味のない物でも霞の大  
切な物を取り上げて、暫くしてから返して、反応を楽しんでいた。



――なんて腹黒い、嫌な姉だったんだろう……。本当になんて人間だったのだろう……。

竜哉さんとよりを戻さないのも……。そうなの？ 私が取り上げたから？

2人の固い絆を引き裂いてしまったのは私……。

――今思えば……。なんて酷い……。私はなんて人だったんだろうと心がズキズキ痛む。

霞ごめん……。謝っても決して許される事じゃないけれど……。本当にごめん。

私がこんな騒ぎを起して散々迷惑をかけたのに、両親は、まめに面会に来てくれた……。沢山差し入れもしてくれた。

そして『刑期が終ったら遠慮せずに家に戻って来なさい……。待つてるから……。』そう言ってくれた。

面会室の分厚いガラス越し……。久しぶりに流れる両親との和やかな時間……。

幸せだと思った……。私……。愛されてたんだ……。幸せになる資格なんてないのに……。

両親はまめに会いに来てくれたけれど、霞は一度も来てくれなかった……。

当然だよ……。謝っても許されないような事をして来たのだから……。

どうやって償えばいいのだろう……。

許される資格はないから、許されたいとは思わない。沢山恨んでいいのだから……。

でも……。償いたい……。私の為に引き裂かれてしまった2人を……。

・もう一度一緒にさせてあげたい。

そして幸せにしてあげたい・・・どうすればいいのだろう・・・。

（第7話に続く）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2907w/>

---

アザミの綿帽子

2011年9月11日13時14分発行